

食行動からみた養育条件と発達に関する研究

1. 食事場面における母子コミュニケーション
2. 食行動の発達と問題食行動の検討
3. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関連
4. 保健所における摂食行動項目の検討

(分担研究：小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究)

八倉巻和子¹⁾ 大場幸夫¹⁾ 村田輝子¹⁾ 森岡加代¹⁾
芦田美保子¹⁾ 大森世都子²⁾ 水野清子³⁾ 高石昌弘⁴⁾

要約

1. 食事場面における母子コミュニケーション

- (1) 食事場面で子どもが食べ物を口に入れた回数のうち、積極的に食べようとして自分から口を開ける回数は、母親による方が保育者による場合よりも多い。
- (2) 子どもと介助する大人との間を行き来する食事時のスプーンの運びは、単に食べ物を運ぶだけではなく、子どもからのサインやタイミングあるいは間のとり方など、大事なコミュニケーションの意味をもつ象徴的なやりとりである。
- (3) 食事場面における子どもへの働きかけについては、介助する大人のおかれている立場や気持ちの余裕の有無などによって、その対応の特徴が「会話を楽しむ」傾向にあらわれたり、反対に「食べることの促し」に現れたりする。
- (4) 食事場面での母子の相互交渉は、2者関係だけではなく、子どもの周囲にいる人数や、接触の頻度によって左右される。
- (5) 子どもの「遊び食べ」には、周囲とひとの対応の仕方が深くかかわっていて、食事が次第に社会的な意味合いを持ち始める一ステップではないかと、興味を持たせてくれる。

2. 食行動の発達と問題食行動の検討

- (1) 「咀嚼」の問題が発生する時期は8カ月頃であり、2歳4ヶ月で消失している。問題のある子どもの母親は、“噛む、飲み込む”ことを教えていない、食事中無理強いする、子どもの世話は仕方ないなどの養育態度がみられる。
- (2) 「偏食」の問題が発生する時期は1歳頃であり4歳まで続いている。これらの子どもの母親は嫌いなものを強制したり、子どもとの接触の少ない傾向がみられる。
- (3) 「遊び食べ」は3歳頃からみられる。これらの子どもの母親は食事中の励ましや手助けをし、交際範囲が広い。

1) 大妻女子大学家政学部 (Faculty of Home Economics, Otsuma Women's Univ.)

2) 国立公衆衛生院母子保健学部 (Dept. of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health)

3) 日本総合愛育研究所 (Nippon Aiku Research Institute for Maternal Children Health & Welfare)

4) 国立公衆衛生院 (The Institute of Public Health)

3. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関連

- (1) 食事上の問題について全く訴えない者は22%である。
- (2) 訴えの項目は、「遊び食い」「むら食い」「偏食」の順である。
- (3) 主訴のない者は意欲的、積極性、表情は生き生き、食生活リズムは安定している。
- (4) 主訴4種以上の者は、消極的、情緒不安定、食生活リズムも不安定である。
- (5) 母親の養育態度については、主訴のない者は育児に全く不安や迷いがなく、ゆったりした気持ちで子どもに接している。4種以上もつ者の母親は、子どもの甘えや要求に応じる割合が高い。

4. 保健所における摂食行動項目の検討

保健所の3歳児健診時にアンケート調査を実施し、子どもの食行動と母親の対応が確認できる項目の検索を行った。

- (1) 3歳児は食習慣の発達する時期であり、母親の対応が重要な時期である。
- (2) 子どもの食行動のうち「遊び食べ」に母親の対応が関連しており、母親の対応のうち、「食事の時の挨拶をする」かどうかにかかわらず子どもの食行動が関連している。

見出し語：子の食行動、遊び食べ、母子関係、働きかけ

はじめに

今まで幼児の食行動の発達と、養育条件について検討してきたが、今年度は、食事の場における、特に母子関係について詳細に分析することにした。

子どもの側の行動にみられる問題と、母親の

側からの働きかけなどを追跡して、今後子どもの食行動発達の保健指導に役立てることを目的とした。

食事についての母子関係を捉えるために各々の研究方法を試み、4つの研究項目を設けた。

1. 食事場面における母子コミュニケーション

大場 幸夫

1. 研究の目的と方法

本研究では食事場面を、集団成員の相互交渉のなされる生活場面の1つとして留意している。従来から、食事をするという行動が、人間関係的、心理的過程であることを経験的に了解されてきた。しかし、その具体的な食事場面の心理社会的ダイナミクスについての示唆を得る研究報告は十分ではない。日常的な生活の流れの中で展開される食事場面における、子どもと養育者の相互交渉に接近し、極力その日常性を損なわずに、普段の状況を収録し、それを資料として詳細に分析検討することを意図した。今回の研究活動は、そのような研究計画の実行に移す端緒にすぎない。あくまでも研究方向の妥当性

研究方法の適切性を吟味するための予備的なステップである。

こうした脈絡にあって、特に今回は発達初期から、家庭と保育所における生活を経験する小児の食事場面をモデルとして焦点を絞り、対比的に分析検討することを研究の目的とした。この場合、われわれの最大の関心は、食事の場面において母親・子ども、及び保育者・子ども間の相互交渉をどのようなカテゴリーで捉えることが可能であるか、にあった。

具体的な研究法は、ビデオ収録を主体とした場面観察法を用いた。予備的な段階において、観察の技法及び条件を検討した。

対象児には、A. Gesellの『発達診断学』か

らKey年齢「40週」に示唆を得て、①ミルクと離乳食の併用、②座位の安定、③起立への自発性、などを考慮し、月齢が9ないし10カ月に相当する小児、しかも保育園と家庭での双方の食事場面の観察とビデオ収録が可能な事例である、という条件で下記の女兒2例を選定した。観察期間は、平成2年8月から10月までの3ヶ月間に延べ17日、観察回数は保育園で14回、家庭で2回であった。女兒2名(T子、M子)は共に1月生まれで、この観察時期にちょうど生後8カ月から10カ月に相当する時期である。

なお、M子は5人家族で、両親、兄二人の第3子、T子は一人っ子で3人家族である。

2. 結果の分析

ビデオ録画を通して、直接に画像を見ながら繰り返し状況を確認する一方、あらかじめ相互交渉の過程を言語記録にしてその逐次的な展開に留意するなどして、以下のような内容分析の観点を得ることができた。

① 与える際のスプーンの持ち方、運び方

この時期の子どもの食事場面ではスプーンの運びはその多くを占めるといえる。

【表-1】 大人がスプーンを運んだ回数と、子どもがすすんで自分から口を開けた回数の関係

(1) M子の場合

	母親がスプーンを運ぶ	保育者がスプーンを運ぶ
自分から口を開けた	52	30
自分から口を開けない	22	22

χ^2 検定 5%レベルで有意差なし

(2) T子の場合

	母親がスプーンを運ぶ	保育者がスプーンを運ぶ
自分から口を開けた	23	10
自分から口を開けない	5	39

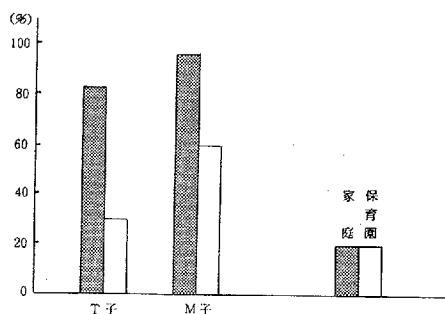
χ^2 検定 1%レベルで有意差あり

表-1からみると、T子は家庭での食事場面では自分からすすんで口を開けて食べようとする“自発的”意図の示し方が顕著である。保育園の食事場面ではむしろ反対にきわめて少ないという結果を示し、母親と保育者との対比に顕

著な違いを示している。一方、M子には家庭と園の食事場面の対比において、T子のように統計的に有意なほどに反応の差は認められなかった。2例の保育者は同一である。スプーンを運ぶ回数は対T子が49回、対M子が52回であり、この点ではともに約50回というペースで共通している。これがその保育者個人の食事介助におけるリズムとみることができる。他方、2例の母親ではその点が異なる。T子の母親は28回、M子の母親では74回ときわめて大きな違いを示す。母親同士のペースにこれほどの違いを示しているが、はっきり拒否のサインを示すT子、運ばれてきたスプーンにとにかく口を開けて頬張るM子、というように子どもの側の反応の差も見逃せない。

同じように、子どもが実際に食べ物を入れた回数と、その内で子どもが自分から口を開けて促したり、積極的に食べようとする回数の関係では、2例とも母親の場合の方が多く、保育者の場合との比較において統計的に有意の差を示した。(図-1参照)。百分率の比較においても、2例ともに保育園よりも家庭で、自発的に食べようとする気持ちが顕著であることを示すものである。

【図-1】 子どもが実際に口に入れた回数とその内子どもが自分から口を開けた回数の関係



② 働きかけ

さらに人のかかわりに留意して食事場面をみる必要があるのではないかと考え、食事場面における母親と保育者の働きかけにどのような違いがみられるかについて検討した。園と家庭での顕著な差を示したT子の場合を例にしてその分

【表-3】 T子に対する母親と保育者の働きかけの比較（回数）

	促す動作	呼びかけ・ 気を引く動作	ことばかけ	身ぶり表情の 働きかけ	こどもの働き かけへの応答	無 視
母親の働きかけ	2	3	26	7	28	0
保育者の働きかけ	29	10	5	1	10	8

析の必要性を確認することにした。表-3はT子に対する母親と保育者の働きかけの比較である。

表に示すように6つの項目で整理しているが、その項目の具体的な内容に留意してみると母親は子どもの食べるという動作そのものに注目した動きよりも、「会話」といえるような応答に丁寧に応じる結果を得た。この点は実際に観察にたった学生（安部理子）の報告からも認められている。保育者の働きかけで顕著な項目は「催促」である。子どもが気を散らさずに食べることを絶えず心がけている様子が鮮明である。食事中に子どもが働きかけてくることに応ずる反応が比較的少ない。「無視する」という項目が、保育者の行動にのみ現れていることも、食事場面への大人の臨み方、取り組みの姿勢の違いの現れとして注目できる。この資料では母親対保育者という構図を浮き彫りにしている印象を与えるが、本研究の意図はそこにはない。問題はむしろ食事場面の援助者である大人（母親、保育者を問わず）の姿勢を基本的に検討するところにある。

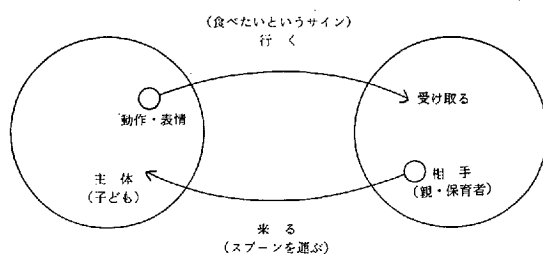
③ 遊び食べ

観察者の報告によると、子どもの「遊び食べ」には周りの人の反応の仕方が深く係わっているという。子どもが食べることを「忘れて」与える大人に働きかけようとする気持ちになっている場面がみられる。人に対してだけでなく、食器や周辺にあるものへの関心さえ著しく、食事を忘れて人やものに係わろうとする。そのような気持ちが育ち始める時期の子どもの通常の姿である。食べる場面も生活の一つの流れに過ぎないことを思うと、子どものそのような行動の発露を食事上の行動や栄養面だけから判断することは決して好ましいことではない。一層の実証的検討が必要である。

3. 考察

本研究は、食事場面が人と人とのコミュニケーションにとって重要な意味をもつことの確認を意図するものであった。その点に関して、研究の結果からどのようなことがいえるだろうか。T子は第1子、M子は第3子であり、家庭での本児の食事場면을囲む人の数と関わりの複雑さにおいて、2例の間には差がある。単に与える人、食べる人という2者関係だけで相互交渉が成り立つのではなく、通常的に子どもを囲む人の数や接触の頻度と質によって左右されることを考慮する必要がある。特に、介助する大人が子どもの食べる行動にのみ気を奪われると、自発的な意思表示のサインとしての口開け動作がみられなくなり、やりとりが歪んでいく恐れがある。観念的な是非論ではなく、生活のプロセスの力動性に留意し、食事を人と人との相互交渉の過程として捉えるファクターを尊重する必要がある。

図-2 食事場面の相互交渉の構図



そのような視点からすると、「大人と子どものやりとりとして食事場面」を再考することは意味をもつ。その象徴的な資料はスプーン運びのやりとりに示される。図-2はそのような状況の図解を試みたものである。

本研究は新しい課題を掘り起こしつつあることを確認できた。引き続き幼児を対象として共同研究を進めていくことにする。

2. 食行動の発達と問題食行動の検討

村田輝子, 八倉巻和子, 芦田美保子

I 目的

筆者らは、子どもの食行動の順調な発達には、順序ある食体験と母子の好ましいかかわりが必要であることを指摘した¹⁾。

母親から訴えのあった食行動上の問題は、発達過程に発生する行動であるのか、あるいは子どもへの対応や配慮など母親の養育態度により発生・消失するものであるのかは十分検討されなければならないと考えている。そのためには、子どもの食行動を長期にわたって追跡し、食行動の発達の過程と、その変化をとらえることが必要であると思われる。そこで母親から訴えのあった子どもの食行動を、咀嚼、偏食、食欲、食事時間、食事量、遊び食べ、姿勢そしてはしが使えないなど8項目について調べた。

本年は、母親の訴えの多かった咀嚼、偏食、遊び食べについてその行動の発達と母親の養育態度との関連を検討した。

II 調査対象および方法

- (1) 調査対象：対象は男児4名、女児5名の計9名である。
- (2) 調査時期：時期は昭和63年4月から平成3年1月までである。
- (3) 調査方法：方法は所定の調査票を作成し、

母親に2カ月ごとの留置記入を依頼した。

(4) 調査項目：次の項目について設問した。

- ・対象児の概要 身体状況、養育環境
- ・乳幼児の食行動 食事状況、食物の摂取状況、摂食行動の状態
- ・母親の養育態度 子どもの食事への対応や配慮

III 結果

1. 対象児の状況

(1) 対象児の概要

対象児の健康状態および養育環境は表1のとおりである。

健康状態は、乳児期にはかぜ、下痢、吐くなどの症状がみられたが、現在は9名とも健康である。虫歯のあるものはみられない。

きょうだいがいるは、D君、T子、U子で、あとの6人は1人子である。

子どもの面倒を見るのが父母であるものは2名、父母と祖母が2名である。その他、父母と祖父母、父母・祖母・きょうだい、祖父母、祖母、きょうだいであるものがそれぞれ1名である。

(2) 食事状況

食事状況については食事担当者、食事の注意

表1 対象児の概要

対 象 児		きょうだい	母の年齢	健康状態		子どもの面倒をみる人				
				乳児期	現在	父 母	祖 父	祖 母	き だ い よ う	
性 別	月 年 齢									
男 児	M	6カ月～3歳4カ月	1人子	30	良好	良好	○	○	○	
	T	6カ月～3歳	1人子	31	普通	良好	○		○	
	D	8カ月～3歳8カ月	1人子	34	不調	良好	○		○	○
	S	8カ月～3歳8カ月	1人子	37	不調	普通	○			
女 児	U	4カ月～3歳1カ月	2人	28	不調	良好				○
	A	7カ月～3歳1カ月	1人子	29	良好	良好	○		○	
	M	7カ月～4歳3カ月	1人子	24	不調	良好		○	○	
	R	6カ月～3歳11カ月	1人子	31	不調	良好	○			
	T	5カ月～3歳	3人	37	不調	普通			○	

点，子どもの食事時刻および食欲を検討した。

食事担当者は，7名が母親で，2名は父親である。

食事について母親が特に注意するのは“栄養に気をつける”が8名，“家庭の団らん”が1名である。

朝・夕食の時刻については，決まっているものは8名であり，不規則が1名である。

食欲については，食欲のある子どもは6名いるが，Y君，S君，M子は時々むらになることがある。

図1 問題となる食行動 —咀嚼困難—

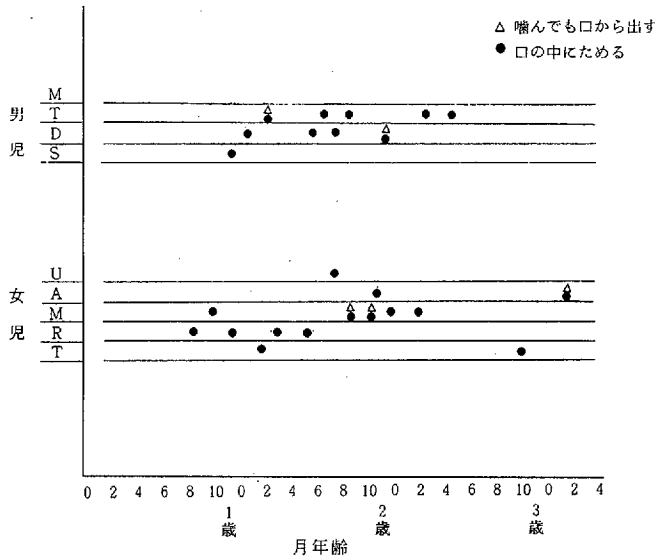


図2 問題となる食行動 —偏食—

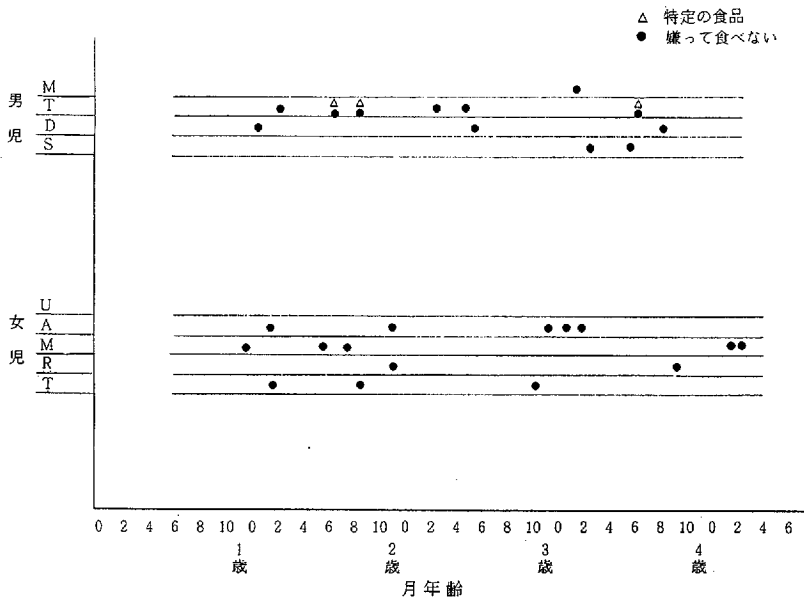
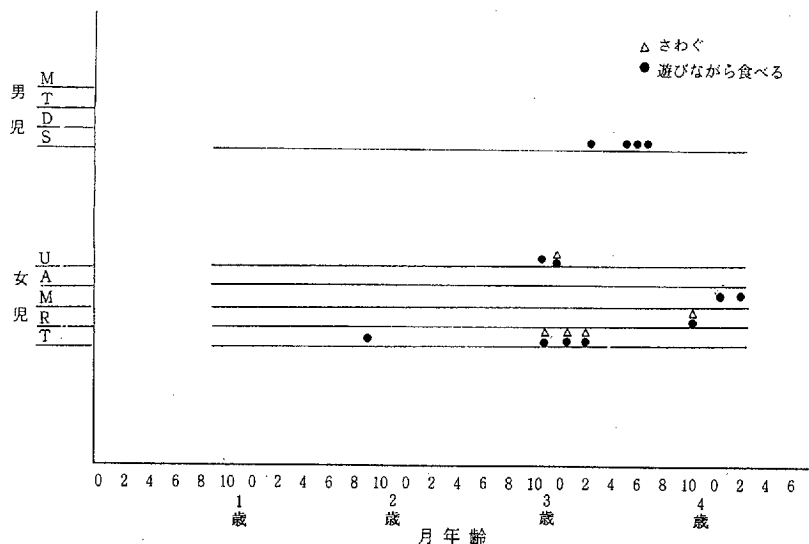


図3 問題となる食行動 —遊び食べ—



(3) 食品の摂取

子どもの食品摂取の状態を知るために食べられる食品の数について検討した。

現在、食べられる食品の数は、最高110種(M子)、最低65種(T子)で平均101種である。

乳児期から現在まで食品数が増加しているものはS君、M君、U子の3名であり、残りの6名には増減がみられる。

2. 訴えのあった食行動

母親から訴えのあった食行動のうち咀嚼困難、偏食、遊び食べなど問題となる食行動については図1～3に示したとおりである。

「咀嚼困難」の訴えには、噛めない、飲み込めない、口の中にとめるなどの行動がみられている。

「偏食」は、特定の食品しか食べない、嫌って食べない食品があるなどがあげられる。

「遊び食べ」は、食事中に遊ぶ、さわぐなど食事に集中できない状態がみられる。

(1) 問題となる行動の発生と消失

・「咀嚼困難」については、8カ月頃から発生し、2歳4カ月になると消失している。しかし、A子とT子の2名は3歳になっても問題が継続している。

・「偏食」については、1歳頃に発生し、4歳になる現在まで断続的に母親からの訴えがあ

表2 食事状況

食行動	子どもの食事状況
咀嚼困難	食品数の増減 年齢による調理形態の順序性 不規則な食事時刻
偏食	食品数の増減大 不規則な食事時刻 食欲にむら
遊び食べ	規則正しい食事時刻 落ち着きがない 食事時間不安定

表3 子どもの食行動と母親の養育態度

食行動	母親の養育態度
咀嚼困難	咀嚼への配慮不十分 強制、叱責 消極的養育態度
偏食	強制、叱責 子どもとの接触不十分 消極的養育態度
遊び食べ	励ます、見守る 食事中の大人の手助け 広い交際範囲

った。

• 「遊び食べ」については、3名の子どもは3歳前後、2名は4歳前後に発生し現在も継続している。

(2) 問題となる食行動と食事状況(表2)

「咀嚼困難」、「偏食」、「遊び食べ」などの食行動を示す子どもの食品数、調理形態、食事時刻、食欲について検討した。

• 咀嚼困難な子どもは、摂取食品数に増減がみられる。また、調理形態については軟らかいものから硬いものへの順序が乱れている。

• 偏食のある子どもは、食品数の増減が大きく、食事時刻は不規則なものが多く、食欲にむらのあるものもみられている。

• 遊び食べの子どもは、食事時刻は規則的であるが、食事に集中できない、一定時間で食べられない状態がみられる。

3. 母親の養育態度

母親の養育態度については、食事場面における子どもの対応を検討した。

母親の中には子どもの食事を「楽しい雰囲気」にし、嫌いなものがあると「励まし」、子どもの世話は「楽しみ」とする者が3名みられる。一方、食事中「口やかましく」悪いことをした時「叱る」そして世話は「仕方ない」者が3名いた。また「無理強い」し、世話は「仕方ない」の母親は2名、「無理強い」と「叱る」が、世話は「楽しみ」とする者が1名いる。

4. 問題となる食行動と母親の養育態度

問題となる食行動と母親の養育態度は表3に示したとおりである。

• 「咀嚼困難」な子どもは6名みられたがそのうち4名は問題が消失しており、それらの母親は、噛む、飲み込むを教えていたことが観察された。問題が継続した子どもについては、母親が噛むことを教えておらず、食事中は無理強いや叱ることが多く、子どもの世話を仕方ないと思っているなど母親の養育態度に問題があることがわかった。

• 「偏食」のある子どもの母親は、嫌いなものを残すと無理強いする、子どもと過ごす時間が少ない、世話は仕方ないなど子どもとの接触到問題がみられる。

• 「遊び食べ」のある子どもの母親は、食事中励ましやてぼしの手助けをするものが多く、近所の人とのつきあいはよく交際範囲が広いことがわかった。

IV 考察

(1) 咀嚼困難について

咀嚼能力は学習することによって獲得され、²⁾³⁾ 臨界期は18カ月頃までといわれている。この時期に噛む、飲み込むなどの摂食行動を適切に学習しなければ咀嚼能力は発達せず、幼児期まで咀嚼困難となる恐れがあると考えられる。したがって、母親が2歳頃までに教えることによって「食べる」ことができ、教えなかった場合には3歳が過ぎても咀嚼の問題は継続すると考えられる。

対象児は、現在3歳後半に達しているので咀嚼能力はすでに獲得されていると思われるが、2名は今だに咀嚼できない状態が観察された。摂食行動の順調な発達には、母親が適切な時期に噛む、飲み込むことを教えたか否かが影響すると考えられる。

(2) 偏食について

子どもは2~3歳頃になると食べ物の好き嫌いが現れてくる。食品の偏りが極端でなければ、栄養的に障害がみられないことから、偏食は問題ないとする考えもある⁴⁾。また、偏食は発達過程に現れるためいずれは消失するともいわれている⁵⁾。しかし、偏食すると食べられるものが制限され、食物の選択範囲が狭くなる。種々の食品を食べられることは、子どもにとって栄養的な意味だけでなく、心理的にも、社会的にもバランスのとれた生活習慣を育てることができる。

子どもに偏食がある場合、母親の子どもに対する養育態度に関係があり、無理に食べさせたり、食事中叱ったりするなどの行動は問題となる。したがって子どもの発達に応じた対応が必要で、子どもの偏食には母親の子どもへのかかわりが密接に関係するものと思われる。

(3) 遊び食べについて

ここで取り上げた遊び食べは、食事中遊びはじめたり、さわいだりして食事に集中できない状態である。このような子どもは座っていることができず、食事は長時間を要する。

子どもは2～3歳になると「ひとりで食べる」状態から皆で食べる「社会食べ」へと発達し⁶⁾、他の子どもの食べるリズムに合わせる能力が育ってくる。遊び食べは発達過程での発生で、年齢が進むに従い消失するとも考えられるが、いつまでもこの状態が続くことは問題と思われる。

この遊び食べの消失には、母親のしつけ、すなわち食事でのマナーを教えることも大切であり、食事を一生懸命食べられるような環境作りも必要であると考えられる。

参考文献

1) 八倉巻和子, 村田輝子, 森岡加代,

大場幸夫, 高野陽子, 高石昌弘,
水野清子: 乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究. 厚生省心身障害研究63年度研究報告書. 211~231

- 2) 広瀬由治: 小児の摂食機能に関する研究. 47(3)405~410, 1988
- 3) 小林登・馬場一雄: 小児 MOOK 小児栄養のすべて. 金原出版 1983
- 4) 小林登・多田哲也, 藪内自治編集: 新小児医学大集 小児栄養学Ⅱ. 中山書店. 1986
- 5) 馬場一雄: 小児生理学. へるす出版. 1983
- 6) 二木武 他: 小児の栄養行動. 医歯薬出版株式会社. 1984

3. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関連

水野清子

I 研究目的

幼児期には偏食、むら食い、少食、食欲不振など、この時期特有の食行動上の問題が出現する。従来、これらの問題発生は主に乳児期に比べ幼児期における発育速度の緩慢化現象および自我の芽ばえによるものと考えられていたが、近年、これらの問題発生には母親の養育態度も何らかの形で影響を及ぼしていることが明らかにされている¹⁾。しかし、これまでの研究は横断的手法によるもので、同一児を対象とした追跡調査は行われていない。

そこで、今回は追跡調査により幼児期における食行動の挙動を観察し、それらの行動がどのような背景により発生し、または消失するかを調べ、保健指導の一助にしたいと考えた。今回は1歳代を対象とした調査結果を報告する。

II 調査方法

愛育会保健指導部ではほぼ定期的に健診を受けている1歳6カ月から1歳10カ月児を持つ母親を対象に、児の食事上の問題の有無及び性格、児に対する母親の生活、食生活、育児観をアンケート方式により調査した。

調査期間は1990年11月～1991年1月である。

調査対象の性格を表1に示す。対象児数は159名(回収率76.8%)で、対象の約72%は第1子で87%は核家族である。

表1 調査対象

		実数	比率
対象数	総数	159 (人)	100.0 (%)
	男	82	51.6
	女	77	48.4
出生順位	第1子	115	72.3
	第2子	31	23.3
	第3子	6	3.8
	双生児	1	0.6
家族形態	核家族	139	87.4
	複合家族	20	12.6

III 調査結果及び考察

1. 母親からみた食事上の問題発生の実態

日常の栄養相談の場で母親が訴える食事上の問題10項目を中心に、5段階尺度でその実態を調査した。

対象児の中、いずれの問題も全く訴えていな

いは159名中35名(22.0%)で、78%の者は何らかの問題を訴えていた。各々の主訴に対して「そう思う及びややそう思う」者の割合をみると表2の通りで、第1位は「遊び食いをする」47.1%、2位「むら食いをする」44.9%、3位「偏食がある」42.8%の順である。1人当りの問題保有数をみると1~3種の者、47.2%、4~6種、27.0%、7種以上、3.8%で、最多保有者は8種類である。

表2 母親が許える食事上的問題

	実数 (人)	比率 (%)
いやいや食べる	2	1.3
食事上の表情が何となく暗い	1	0.6
むら食いをする	71	44.9
少食である	29	18.2
好き嫌いがある	68	42.8
特定の食品だけを食べる	59	37.1
食べるのに時間がかかる	40	25.2
遊び食いをする	75	47.1
咀嚼くに問題がある	42	26.7
間食を好み、食事を食べない	18	11.4

2. 食事上的問題発生と子どもの性格

子どもの性格を「活発」「積極的」「意欲」「表情」「情緒」の5面から調査した。児が「活発である」「積極的である」「意欲的である」「表情が生き生きしている」「情緒が安定している」と思っている者は、それぞれ約71%、48%、64%、88%、50%であった。そこで食事上的問題を訴えていない者(問題無群と略称)と4種以上の訴えを持つ者(4種以上群と略称)とに分けて、子どもの性格との関連づけを試みた。その結果を図1に示す。

「活発である」者は問題無群、97.2%、4種以上群、94.0%で両群はほぼ同率であったが、「積極的である」「意欲的である」「表情が生き生きしている」「情緒が安定している」者の割合は、問題無群に比べ4種以上群に幾分低率であった。

3. 生活及び食生活リズムと食事上的問題発生との関連

食事を含む規則的な生活リズムの確立は、良好な食欲を維持するために不可欠な条件であるが、児の生活及び食生活リズムに対する母親の

図1 食事上的問題発生と子どもの性格

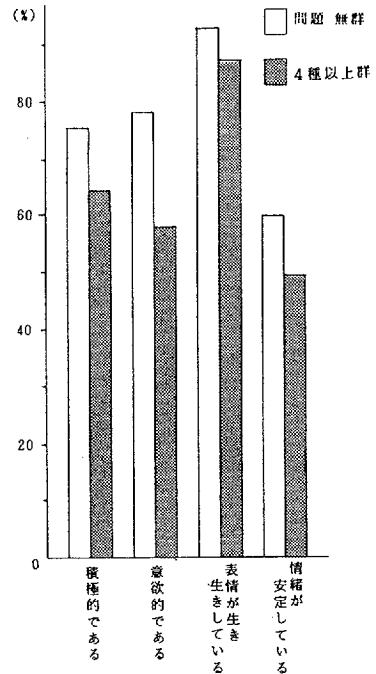


表3 生活及び食生活リズムと食事上的問題発生

		一定	ほとんど一定	ほとんど不定	不定	
生	起床時刻	問題 無 4種以上	37.1 10.2	60.0 81.6	0 4.1	2.9 4.1
	昼寝時刻	問題 無 4種以上	17.1 2.0	77.1 2.0	5.7 16.3	0 10.2
活	就寝時刻	問題 無 4種以上	28.6 4.1	68.6 83.7	0 10.2	2.9 2.0
食	朝食時刻	問題 無 4種以上	28.6 14.3	71.4 75.5	0 6.1	0 4.1
	昼食時刻	問題 無 4種以上	31.4 14.3	62.9 67.4	2.9 12.2	2.9 6.1
生	夕食時刻	問題 無 4種以上	34.3 20.4	65.7 65.3	0 14.3	0 0
	間食時刻	問題 無 4種以上	11.4 4.2	68.6 37.5	11.4 39.5	8.6 18.8

意欲も食事上的問題発生に何らかの影響を及ぼしている可能性が考えられる。そこでこれらの関係を観察してみた。

生活リズムは起床、昼寝、就寝時刻に、食生活リズムは朝食、昼食、夕食、間食時刻に焦点

を当てて調査した。起床、昼寝、就寝時刻が一定な者の割合は、それぞれ23.9%、23.3%、26.4%、9.5%で、特に間食時刻が「やや不安定又は不定」という者の割合は40.5%と高率であった。

これらの生活及び食生活リズムと食事上の問題発生との関係を見ると表3の通りで起床、昼寝、就寝時刻のいずれも問題無群に比べ4種以上群では「一定」の者の占める割合が低く、「やや不定」及び「不定」の者の割合が高い。一方、食事時刻との関係を見ると生活リズムの場合と同様の傾向が観察された。特に問題無群には朝食、夕食時刻が「やや不定」「不定」の者が見られないのに対し、4種以上群にはこれらに属するものが10~14%に観察されている。また、間食時刻が「不定」の者の割合は4種以上群に高かった。

4. 母親の食意識と食事上の問題発生に関連

最近、若い母親の食意識の低下傾向が話題にのぼる。著者はすでに母親の食意識と子どもの健康状態との関連づけを試み、食事作りに積極的姿勢を示すものの児の健康状態は良好であったことを観察している。そこで幼児期にみられ

る食事上の問題発生と母親の食事作りに対する姿勢との間に何らかの関係があるか否かを調査した。

対象の58.5%の母親は食事作りに対して特に負担を感じていず、また、26.4%の者は「大変だが楽しい」と答えている。しかし、「仕方がないので作る」または「食事作りがおっくうまたは面倒」という者はそれぞれ6.9%、8.2%に観察された。このような食事作りに消極的姿勢を示す者の大部はメニューを考えることが大変であるというものが多い。

図2に示したように、問題無群の母親は4種以上群の者に比べ、食事作りに対して「特に負担を感じない」者の割合が高く、「おっくうまたは面倒」という者は皆無であったが、4種以上群の母親は問題無群に比べ「仕方がないので作る」「おっくうまたは面倒」という者の割合が高かった。

最近、子どもに用意する1日の料理数により子どもの栄養摂取状況を評価する試みがなされている。それによると1日の料理数が16~20種の者は栄養摂取量は良好であり、11~15種の者は一部の栄養素が不足し、10種以下の者は栄養不足状態にあるといわれている。このような観点から食事上の問題の発生状況を見ると図3の

図2 母親の食意識と食事上の問題発生

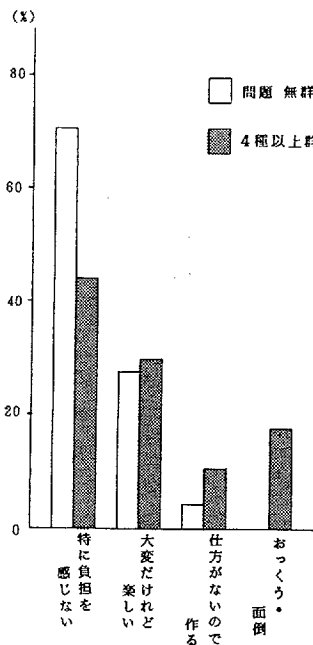


図3 1日の料理数と食事上の問題発生

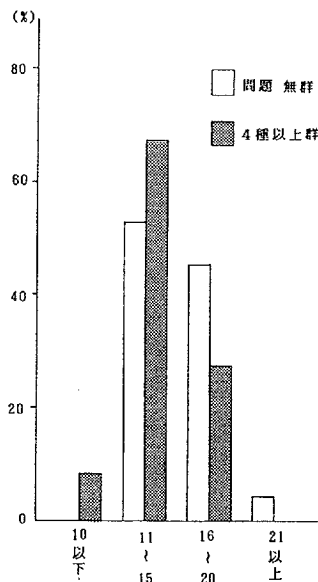


図4 各食事時における料理数と食事上の問題発生

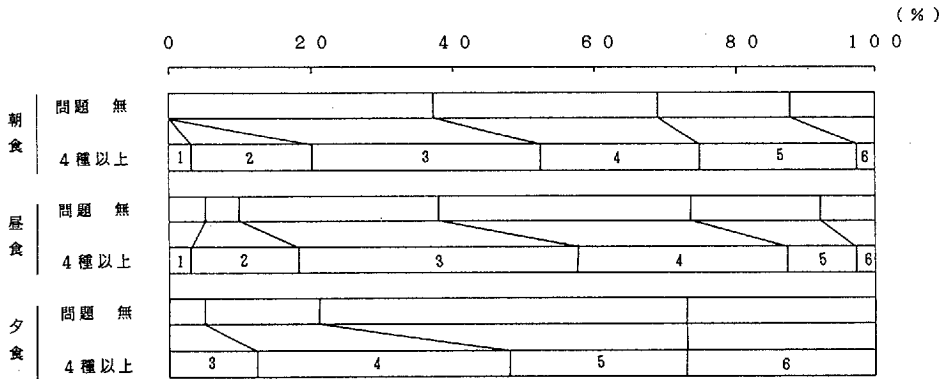


表4 母親の養育態度 (%)

養育態度	肯定的な者 (%)
ゆったりとした気分で子どもと過ごす時間が多い	39.9
子どもの気持ちや要求を上手にくみとっている	65.2
子どもの甘えや要求に応じることが多い	57.0
育児に不安や迷いはない	33.5
主人は育児に協力的	67.9
主人は育児について相談にのってくれる	81.6
近所に育児のことを話し合う人がある	78.6
育児は大変だが楽しい	85.5
子どもと上手に遊んでやれる	50.6
外で他の子どもと触れあう機会が多い	57.6

ようで、問題無群に比べ4種以上群の母親は1日に用意する料理数が少なく、栄養摂取面においても何らかの問題のあることが示唆される。図4に示したように特に朝食時における料理数が1～2種の者の割合が4種以上群に観察された。

5. 食事上の問題発生と母親の養育態度

表4に示した10項目により母親の養育態度を評価した。各項目に対して肯定的な回答をした者の割合は表1の通りで、「ゆったりとした気持ちで子どもと過ごす時間が多い」という者は半数に満たないが、60%前後の者は「子どもの気持ちや要求を上手にくみとっている」または「子どもの甘えや要求に応じることが多い」ことが観察された。育児に不安や迷いはないと

いう者は33.5%とやや低率であるが、68～82%の者は主人から育児に関する援助を得ており、また、79%の者は近所に育児に関する話相手がいると、いう。そして約半数の母親は「外で他の子どもと触れあう機会が多い」と答え、子どもの上手な遊び相手になっている。

食事上の問題発生と母親の養育態度との関係は表5のようで、「子どもの甘えや要求に応じることが多い」者は問題無群より4種以上群に多く、逆に応じないものは問題無群に多い。この結果から4種以上群の母親は子どもの要求を受け入れるために、食事上の問題発生に一層拍車がかかる可能性が考えられる。また、「育児に不安や迷いはない」者は4種以上群に圧倒的に少ない。即ち育児に不安や迷いがあるために子どもの甘えや要求に応じることが多くなる可能性が考えられる。問題無群に比べ、4種以上群には「ゆったりとした気分で子どもと過ごす時間が多い」「近所に育児のことを話し合う人がある」「子どもと上手に遊んでやれる」「外で他の子どもと触れあう機会が多い」者の割合が幾分低い傾向が観察された。また、両群間に「子どもの気持ちや要求を上手にくみとっている」者の割合は殆ど差異がみられない。このことは両群間の母親に子どもの気持ちや要求のくみとり方に違いがあることを物語っているように思われる。即ち、問題無群の母親は上手にくみとって食事上の問題発生を抑えている可能性があり、逆に4種以上群の母親は子どもの気持ちや要求をくみとる結果、食事上の問題が発生する

のであろうと思われる。

以上の結果から幼児期にみられる食行動の発
生に、子どもに対する母親の生活・食事観及び
養育態度が何らかの影響を及ぼしていることが
示唆された。今後、3歳の時点まで追跡し、こ
れらの食行動の発達または消失状態を調査し、
その背景を観察したい。

文 献

- 1) 八倉巻和子：食行動からみた養育条件と発
達に関する研究，厚生省心身障害研究「地域
・家庭環境の小児に対する影響等に関する研
究」平成元年度研究報告書，p.114 1991.

4. 保健所における摂食行動項目の検討

森岡加代，大森世都子，八倉巻和子

I 目 的

これまでの研究では、子どもの順調な食行動
の発達を促すには、母子の好ましい関わりが必
要であることを指摘^{1,2,3,4)}してきた。また、母
親が子どもの食行動について「困ったことがあ
る」と訴えた項目の多い年齢は4歳であった⁴⁾
ことから、それ以前の3歳頃に問題があると考
えられる。1～3までの研究項目からも、子ど
もの食行動は母親の対応の影響が大きいことが
判った。そこで今回は、保健所の3歳児健診時に

アンケート調査を実施し、子どもの食行動と母
親の対応が確認できる項目を検索することにし
た。

II 方 法

(1) 調査対象は、東京都内3保健所で3歳児
健診を受診した男児239名、女児248名、計
487名である。

(2) 調査時期は、平成2年9月から11月の3
カ月である。

(3) 調査方法は、各月の3歳児健診時にアン

図1 子どもの食行動

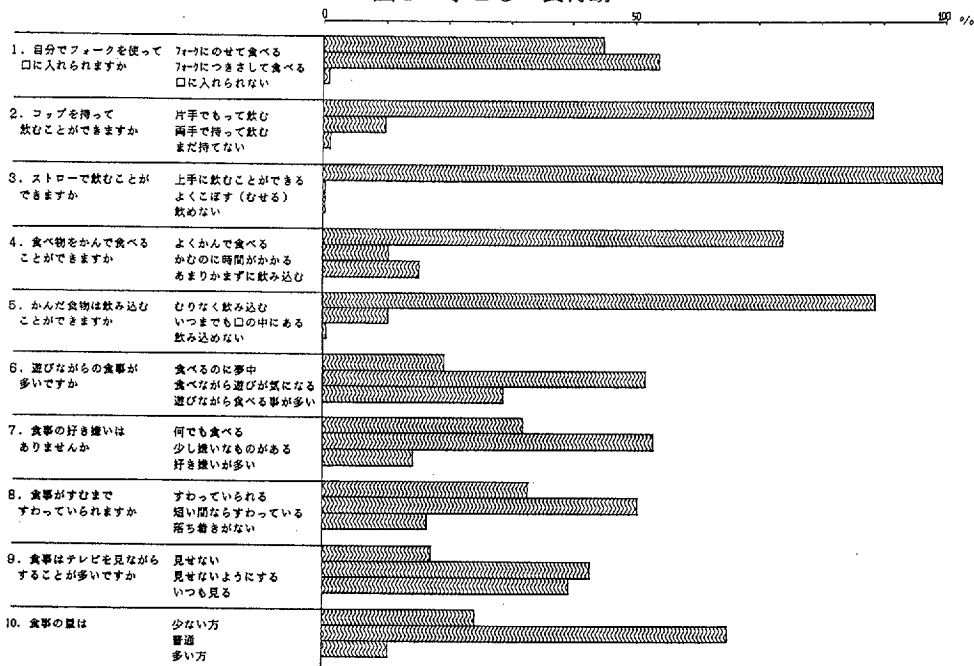


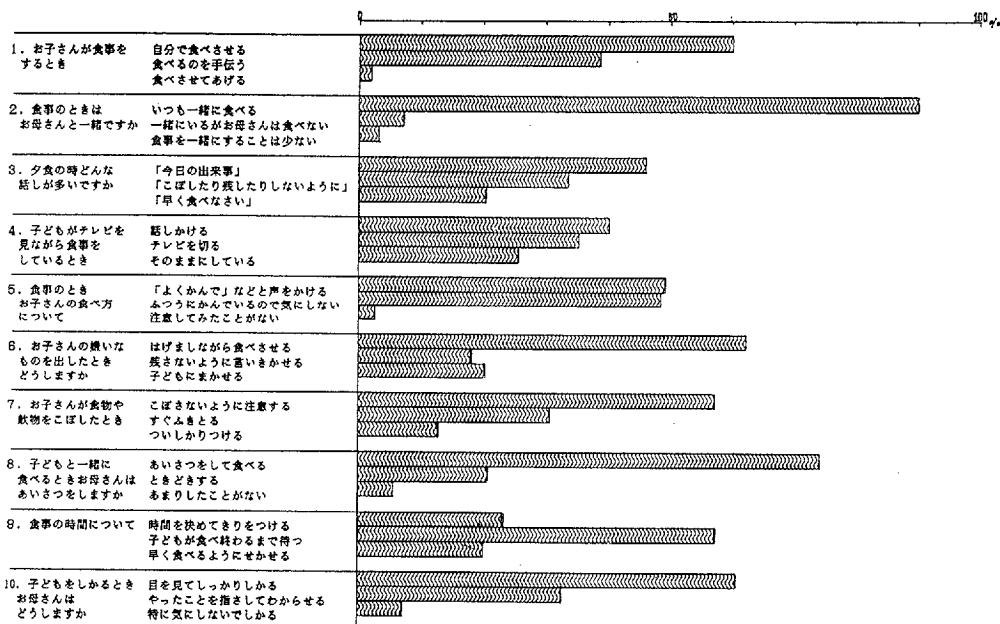
表1 お子さんのことについて
おうかがいします

- | | |
|--------------------------|---|
| 1. 自分でフォークを使って口に入れられますか | 1. フォークにのせて食べる
2. フォークにつきさして食べる
3. 口に入れられない |
| 2. コップを持って飲むことができますか | 1. まだ持てない
2. 両手で持って飲む
3. 片手で持って飲む |
| 3. ストローで飲むことができますか | 1. 上手に飲むことができる
2. よくこぼす(むせる)
3. 飲めない |
| 4. 食べ物をかんで食べることができますか | 1. よくかんで食べる
2. かむのに時間がかかる
3. あまりかまわずに飲み込む |
| 5. かんだ食物は飲み込むことができますか | 1. むりなく飲み込む
2. いつまでも口の中にある
3. 飲み込めない |
| 6. 遊びながらの食事が多いですか | 1. 遊びながら食べる事が多い
2. 食べながら遊びが気になる
3. 食べるのに夢中 |
| 7. 食事の好き嫌いはありませんか | 1. 好き嫌いが多い
2. 何でも食べる
3. 少し嫌いなものがある |
| 8. 食事がすむまですわっていられますか | 1. 落ち着きがない
2. すわってられる
3. 短い間ならすわっている |
| 9. 食事はテレビを見ながらすることが多いですか | 1. いつも見る
2. 見せないようにする
3. 見せない |
| 10. 食事の量は | 1. 少ない方
2. 普通
3. 多い方 |

表2 お母様におうかがいします

- | | |
|------------------------------|---|
| 1. お子さんが食事をするとき | 1. 食べさせてあげる
2. 食べるのを手伝う
3. 自分で食べさせる |
| 2. 食事のときはお母さんと一緒ですか | 1. いつも一緒に食べる
2. 一緒にいるがお母さんは食べない
3. 食事を一緒にすることは少ない |
| 3. 夕食の時どんな話しが多いですか | 1. 「今日の出来事」
2. 「こぼしたり残したりしないように」
3. 「早く食べなさい」 |
| 4. 子どもがテレビを見ながら食事をしているとき | 1. テレビを切る
2. 話しかける
3. そのままにしている |
| 5. 食事のときお子さんの食べ方につ | 1. 「よくかんで」などと声をかける
2. ふつうにかんでいるので気にしない
3. 注意してみたことがない |
| 6. お子さんの嫌いなものを出したときどうしますか | 1. 残さないように言いかけせる
2. はげましながら食べさせる
3. 子どもにまかせる |
| 7. お子さんが食物や飲物をこぼしたとき | 1. すぐにふきとる
2. ついしかりつける
3. こぼさないように注意する |
| 8. 子どもと一緒に食べる時お母さんはあいさつをしますか | 1. あいさつをして食べる
2. ときどきする
3. あまりしたことがない |
| 9. 食事の時間について | 1. 子どもが食べ終わるまで待つ
2. 時間を決めてきりをつける
3. 早く食べるようにせかせる |
| 10. 子どもをしかる時お母さんどうしますか | 1. 目を見てしっかりしかる
2. やったことを指さしてわからせる
3. 特に気にしないでしかる |

図2 母親の対応



ケート用紙を配布し、母親に記入を依頼して当日回収した。

(4) 調査項目は、保健所の限られた時間内に回答してもらうため、項目数を最少限とした。対象の属性および子どもの食行動に関する設問、母親の対応に関する設問各々10項目とした。

Ⅲ 結果

(1) 対象児の概要

対象児の平均身長・体重は男児 94.8 cm・14.3 kg、女児 93.5 cm・13.8 kgであり、平均カウプ指数は、男児 15.9・女児 15.7である。

平均家族数は4.7人で、核家族世帯は73.6%、三世帯世帯は25.8%といずれも全国値⁵⁾より多くなっている。父母の年齢は、30歳代が約70%である。父の職業は常用労働者が70.8%、自営業24.5%であり、母は専業主婦が67.4%である。兄弟のある子は76.6%であり、第1子37.1%、第2子47.2%、第3子以上は15.7%である。保育者は、93%が母親である。

(2) 子どもの食行動

子どもの食行動に関する設問は表1に示す10項目である。1～3は食器の操作について、4と5は咀嚼について、6～10は食習慣についての設問である。回答の結果は図1に示すとおり

である。食器の操作については、“ストローで上手に飲む”99%“コップを片手で持って飲む”89%であり、フォークは“つきさして”“のせて”を合わせると99%が使うことができると答えている。咀嚼については、“よくかんで食べる”74%、“むりなく飲み込む”は89%である。食習慣については“遊び食べ”や“好き嫌い”のある子が約70～80%である。また“いつもテレビを見ながら食事をする”のは約40%であり“食事量”は普通である子が65%である。

(3) 母親の対応

母親の対応に関する設問は表2に示す10項目である。2は食事の時子どもと一緒にかどうか、3～7は子どもの話しかけについて、1と8～10は、しつける時の母親の姿勢についての設問である。回答の結果をみると(図2)、90%の母親は“子どもと一緒に食事をする”と答えている。さらに①夕食の時、②子どもがテレビを見ている時、③食事の時の食べ方、④嫌いなものを出した時、⑤子どもがものをこぼした時の異なった5つの食事場面において、それぞれ約40%の母親が子どもに話しかける方法をとっている。“しつける”については“自分で食べさせる”74%“目を見て叱る”60%と母親の積極的な姿勢

表3 母親の対応と子供の食行動

子供の食行動	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10
母親の対応	自分でフォークを使って口に入れられますか	コップを持って飲むことができますか	ストローで飲むことができますか	食べ物をかんで食べるのができますか	かんだ食物は飲み込むことができますか	遊びながらの食事が多いですか	食事の好き嫌いはありませんか	食事がすむまですわっていられますか	食事はテレビを見ながらすることが多いですか	食事の量は
1. お子さんが食事をするとき	**			**		***	**	***		**
2. 食事のときはお母さんと一緒にですか		***	***					*		
3. 夕食の時どんな話が多いですか					*	*	*	*	**	*
4. 子どもがテレビを見ながら食事をしているとき									***	
5. 食事のときお子さんの食べ方について		**		***	***	*	**			
6. お子さんの嫌いなものを出したときどうしますか	*					**				
7. お子さんが食物や飲物をこぼしたとき					***					
8. 子どもと一緒に食べるときお母さんはあいさつをしますか		**	**		*	*	***	*	*	
9. 食事の時間について				**	*	***		**		**
10. 子どもをしかるときお母さんどうしますか										

が伺われる。食事時間については「食べるまで待つ」と答えた母親が57%あり、食習慣の自立を促しながら、子どもの行動を受容する姿勢もみられる。

(4) 子どもの食行動と母親の対応

次に子どもの項目と母親の項目との関連をみるために、子どもの食行動項目と母親の対応項目をクロスし、カイ二乗検定をした結果が表3である。

子どもの食行動に最も多く関連のみられる母親の設問項目は「食事の時の挨拶」である。子どもの食行動のうち、コップやストローの操作と、咀嚼、そして遊び食べや好き嫌い、食事中のテレビなど食習慣についての項目で、挨拶をする母親の子どもに好ましい状態の回答率が高

くなっている。

母親の対応に最も多く関連のみられる子どもの設問項目は「遊び食べ」である。母親の対応のうち、話しかけについての3項目と、しつける時の姿勢についての3項目で、母親の対応が好ましい子どもに「遊び食べ」が少なくなっている。

子どもの食行動別にみると、咀嚼については母親の話しかけの項目に、食習慣については話かけとしつける時の姿勢の項目に多く関連がみられる。

IV 考 察

3歳児の食行動の発達は、食器に対する適応、食事のための協応動作を経て、食習慣の発達の時期である⁷⁾といわれる。本調査でも食器の操作についての機能はほぼ完了の状態にあり、嚙

む・飲み込む等の咀嚼機能についても80～90%が完了していると考えられる。しかし食習慣については70～80%が発達過程にあり、基本的生活習慣の形成の時期^{8,9)}として、母親の対応は重要であると思われる。本調査の母親の対応をみると、多くの食事場面で“話しかける”方法をとっており、その子どもの食行動は好ましい状態が高率である。特に子どもの食行動のうち、食器の操作や咀嚼など機能的な発達に、母親の話しかけとの関連がみられ、食習慣については話しかけに加えて、しつける姿勢に関連がみられる。このことから、母親の対応を確認することは、子どもの順調な食行動の発達にかかわる1条件として必要であると考えられる。また、今回の結果では“母親が食事の時挨拶をするか”の項目が10項目中最も有効であると考えられる。

参考文献

- 1) 八倉巻和子：乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究，厚生省心身障害研

- 究，昭和61年度研究報告書。
- 2) 八倉巻和子：乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究，厚生省心身障害研究，昭和62年度研究報告書。
- 3) 八倉巻和子他：乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究，厚生省心身障害研究，昭和63年度研究報告書。
- 4) 八倉巻和子他：食行動からみた養育条件と発達に関する研究，厚生省心身障害研究，平成元年度研究報告書。
- 5) 総務庁統計局：家計調査年報 1989年
- 6) 厚生省：国民生活基礎調査 1989年
- 7) 津守真・磯部景子：乳幼児精神発達診断法 3歳～7歳まで，大日本図書 1982年
- 8) 高野陽編：保育講座小児保健，ミネルヴァ書房 1990年
- 9) 前川喜平・三宅和夫編：別冊発達 発達検査と発達援助 誕生から3歳まで，ミネルヴァ書房 1988年

Studies of Mental and Physical Handicaps for '92 by MHW
(Studies of the Influences of Regions and Environments on Children)

Studies Concerning the Bringing up Conditions as Seen from the Eating Behaviors and Development

1. Mother-and-Child Communication on Eating Scenes
2. Development of Eating Behaviors and Examination of Questionable Eating Behaviors
3. Relationship between Eating Behaviors and Bringing up Functions
4. Examination of the Items Associated with Eating Behaviors at Health Centers

(Divided Studies: Studies Concerning the Influences of the Region and Homes on the Growth and Development of Children)

Kazuko Yakuramaki¹⁾, Yukio Ohba¹⁾, Teruko Murata¹⁾,
Kayo Morioka¹⁾, Mihoko Ashida¹⁾, Yotsuko Ohmori²⁾,
Kiyoko Mizuno³⁾, Masahiro Takaishi⁴⁾

Key Words: Eating Behaviors of the Child, Playful Eating, Mother, and Child Relation, Actions on

Abstract

1. Mother and Child Communications on Eating Scenes

1) Among the frequencies of putting the morsel into the mouth by a child during eating, the number of occasions of the opening of the mouth by a child has been more when offered by the mother than by a person who brings him up.

2) The act of transporting the spoon to the child's mouth during eating between a child and the person who helps the eating does not merely mean the transportation of the morsel. Rather, it is a symbolic give-and-take implying an important communication of a sign from the child or a suggestion of a sign from the child or a suggestion of a timing.

3) Actions to children during eating occasions are exhibited by characteristically enjoying conversations or urging eating, depending on the situations of the adults who help eating or their moods.

4) Mutual interferences between mother and child on eating scenes are affected not only by their relations, but also by those who happen to be present surrounding children or how deep their contact was.

5) The "playful eating" by children is closely associated with their relation with the people surrounding them, which makes us feel interesting whether the eating might be the first step of being a social occasion.

2. Development of Eating Behaviors and Examination of Questionable Eating Behaviors

(1) It is considered that the chewing problem may be started from the 8th month, which has disappeared when the child was at the age of 2 years and 4 months. The mothers of children with some problems have not taught their children how to chew foods or how to swallow them down. We have observed in these mothers a bringingly attitude to force them to eat or a philosophy that taking care of their eating cannot be helped.

(2) The problem of unbalanced diet will usually arise when the child is at about 1 year old and continue until about 4 years of age. It was observed in the mothers of these children to force them to eat foods which they did not like, or their contact with them was not so much.

(3) The habit of "playful eating" was noted when the child was about 3 years old. It was found in the mothers of these children that they assist or encourage the children during eating, and that the scope of their friendship was large.

3. Relationship between the Eating Behaviors and Bringing up Functions at Infancy

(1) The percentage of those who had appeal for any food problem was 22%.

(2) The items of appeals were in the order of "playful eating," "irregular eating," and "unbalanced diet".

(3) In those who have had no main appeals were positive and willing, in whom expressions were vivid, and their rhythms of eating life were stable.

(4) Whereas in those who have had more than 4 kinds of appeals were negative, and their emotions were unstable.

(5) Concerning the bringing up attitudes of mothers, it was noted in those who have had no appeals no anxiety or perplexity was found, and these mothers were treating their children leisurely.

On the other hand those mothers who kept more than 4 kinds appeals showed an easier attitude for complying with requests from children.

4. Examination of the Items at Health Centers for Eating Discipline

An examination with the questionnaire was performed at health centers concerning the eating discipline of three-year-old children when their health was screened in order to confirm whether the children's eating behaviors could be properly responded by the mothers. The following results were obtained:

1) Since during this period children's eating habits are developed, the mothers' responses in this period are considered important.

2) It was found that among the children's eating behaviors, mothers' responses are associated with the 'playful eating', whereas among the mothers' responses, the question of whether children would make proper greeting for eating or not is associated with children's eating behaviors.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

1. 食事場面における母子コミュニケーション

(1) 食事場面で子どもが食べ物を口に入れた回数のうち、積極的に食べようとして自分から口を開ける回数は、母親による方が保育者による場合よりも多い。

(2) 子どもと介助する大人との間を行き来する食事時のスプーンの運びは、単に食べ物を運ぶだけではなく、子どもからのサインやタイミングあるいは間のとり方など、大事なコミュニケーションの意味をもつ象徴的なやりとりである。

(3) 食事場面における子どもへの働きかけについては、介助する大人のおかれている立場や気持ちの余裕の有無などによって、その対応の特徴が「会話を楽しむ」傾向にあらわれたり、反対に「食べることの促し」に現れたりする。

(4) 食事場面での母子の相互交渉は、2 者関係だけではなく、子どもの周囲にいる人数や、接触の頻度によって左右される。

(5) 子どもの「遊び食べ」には、周囲とひとの対応の仕方が深くかかわっていて、食事が次第に社会的な意味合いを持ちはじめの一ステップではないかと、興味を持たせてくれる。

2. 食行動の発達と問題食行動の検討

(1) 「咀嚼」の問題が発生する時期は 8 ヶ月頃であり、2 歳 4 ヶ月で消失している。問題のある子どもの母親は、“噛む、飲み込む”ことを教えていない、食事中無理強いする、子どもの世話は仕方ないなどの養育態度がみられる。

(2) 「偏食」の問題が発生する時期は 1 歳頃であり 4 歳まで続いている。これらの子どもの母親は嫌いなものを強制したり、子どもとの接触の少ない傾向がみられる。

(3) 「遊び食べ」は 3 歳頃からみられる。これらの子どもの母親は食事中の励ましや手助けをし、交際範囲が広い。

3. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関連

(1) 食事上の問題について全く訴えない者は 22%である。

(2) 訴えの項目は、「遊び食い」「むら食い」「偏食」の順である。

(3) 主訴のない者は意欲的、積極性、表情は生き生き、食生活リズムは安定している。

(4) 主訴 4 種以上の者は、消極的、情緒不安定、食生活リズムも不安定である。

(5) 母親の養育態度については、主訴のない者は育児に全く不安や迷いがなく、ゆったりした気持ちで子どもに接している。4 種以上もつ者の母親は、子どもの甘えや要求に応じる割合が高い。

4. 保健所における摂食行動項目の検討

保健所の 3 歳児健診時にアンケート調査を実施し、子どもの食行動と母親の対応が確認で

きる項目の検索を行った。

(1)3歳児は食習慣の発達する時期であり、母親の対応が重要な時期である。

(2)子どもの食行動のうち「遊び食べ」に母親の対応が関連しており、母親の対応のうち、
“食事の時の挨拶をする”かどうかは子どもの食行動に関連している。